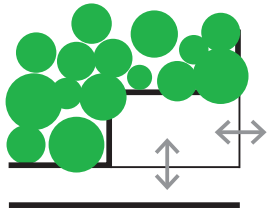


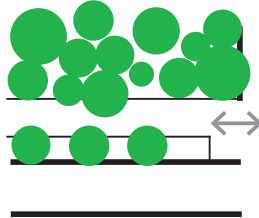
分析Bより得られた、公園と周辺都市の関係性の型を表にまとめる。

公園の側

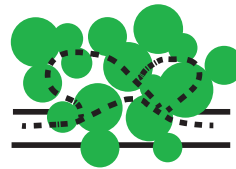
公園の側で行われていたことは、以下の4つの型があった。どれも公園の一部を周囲に連続させるという意図がある。



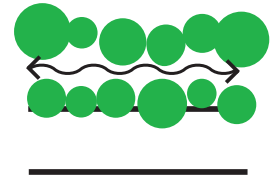
1. 公園の一部が周囲に開いた広場
(新宿御苑、清澄庭園)



2. 歩道と連続した公園
(木場公園)



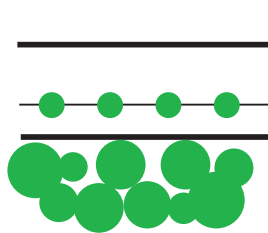
3. 公園に歩道が入っていく
(芝公園)



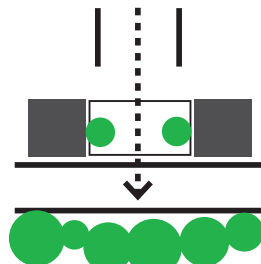
4. 公園の敷地境界につくられた遊歩道
(新宿御苑)

周辺都市の側

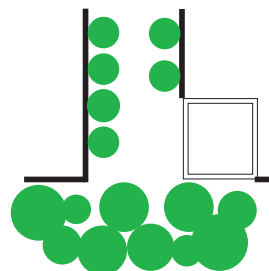
自治体による整備と、周辺住民による自然発生的なものの二つのタイプがある。



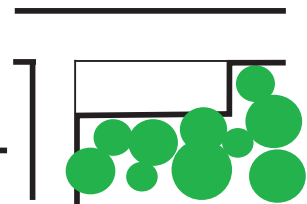
5. 公園に面した道路の歩道を整備
(新宿御苑、有栖川公園、六義園、木場公園)



6. 公園へ視線が通る小公園
(木場公園)

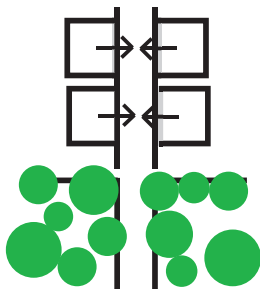


7. 公園から伸びる遊歩道と広場
(代々木公園)

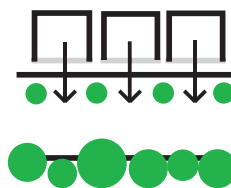


8. 公園に隣接した広場
(清澄公園)

自治体による整備

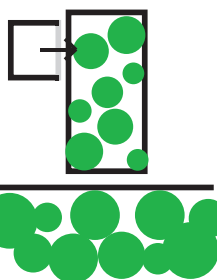


9. 公園へと繋がる道に商業が集まる
(青山霊園、有栖川公園)

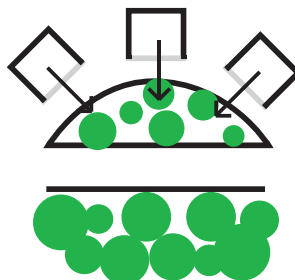


10. 公園に面するカフェなどの
商業分布
(新宿御苑)

周辺住民による自然発生的なもの



11. 公園に隣接する小公園とカフェ
(自然教育園)



12. 小公園を囲い込む空間
(代々木公園)

自治体による整備と
周辺住民との両方

分析A、Bの両方から得られたことをまとめ、公園が周辺環境に及ぼす影響についてまとめる。

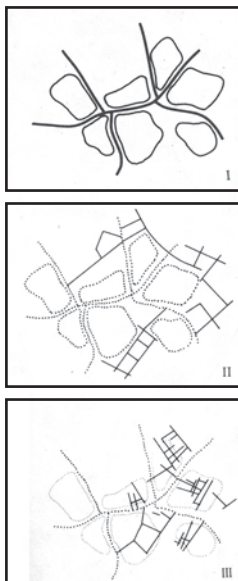
○公園に隣接する領域にとって、公園に見える緑が街の背景となり、領域にまとまりができる。

視覚領域が広い[c. 長い線分の反復]、[e. 長短の線分の反復]となる場所は、江戸期には武家地として既に街路パターンが出来上がっていた場所であることが多い。こうした場所の視覚領域の境界は、街路パターンの切り替わりである。

江戸の街路パターンについて、「全体を一つのシステムで統御するのではなくその場その場に適合する解として陣取り式に空間が埋められていく。」^(*)ことが指摘されている。江戸はいくつもの領域が寄り集まって全体ができているが、ひとつの領域の中では規則性のある街路パターンが敷かれていた。「その陣取りの陣と陣の隙間、ある場合は一つの陣も街路の網目から抜け落ちて非都市的な場所、自然、緑となっている。」^(*)大規模公園の前身である武家屋敷は、抜け落ちた一つの陣である。周囲から屋敷の中の緑が見えるという視覚的な繋がりが生まれていた。

分析Aよりひとつの陣の境界である街路パターンが変化する場所で視覚領域が途切れることから、武家屋敷に隣り合う領域では屋敷の方角を向いている道に出れば緑が見えるが、さらに隣の領域に移ると緑は見えなくなる。つまり武家屋敷に見える緑は、隣合う領域からしか見えずその場所限定された背景として機能しており、一つの街路パターンにまとまりを与える働きをしていた。武家地が豊富にあった江戸期では、どの場所も隣接した武家屋敷を緑の背景として持っていたのではないか。

現在では、公園として残る武家屋敷は少なくなり背景としての緑を持つ場所は限られている。また都市の過密化・高層化により見える緑の量は減ってしまい、街路パターンが継承されていることで同じように公園に隣接する領域から緑の背景ではなくなってしまったが、公園の存在を示すサインとしての働きをしている。



麻布・道の変遷

(*) 槇文彦 他 「見えがくれする都市」 鹿島出版会

○明治以降に宅地化された場所は、公園と隣接していることを無視した場所になっている。

f. 点在となるのは、公園に宅地が直に面している場合である。これは清澄庭園の河川にかかる橋からの緑の見えを除けば、どれも江戸期以降に武家屋敷や百姓地が宅地化された場所である。こうした場所は、低地で宅地にはしづらい場所が多く、現在は公園に直に目宅地宅地が接する密集住宅地となっている。公園の近くという環境の良さを活用した空間作りがなされず、逆に悪い環境になってしまっている。

○公園への連続性と公園の環境の利用

公園と周辺都市の繋がり方には、外部から公園への連続性をつくろうとすることが基本にある。連続性は、アクセスのしやすさや視線が公園にまで通ることによってつくられる。さらに公園の一部が広場化して外部に開いたり、公園に隣接する小公園が作られることも公園とオープンスペースとしての連続性を持ちながらも性格の違う場所となり、おもしろい繋がり方をしている。公園に隣接した小公園は、計画的につくられた場所だけでなく、自然教育園の（場所1）の例のように、広幅員道路として計画されたが頓挫した場所を公園としている例もある。

周辺住民によってつくられる関係性は、公園の環境を利用しようとして起きている。特にカフェについては、園の近くで環境がよいと感じられる場所にかなりの割合で存在しており、場所の良さを読み取っている。

○公園が奥をつくる。

公園の境界が塀で囲まれている場所には、周囲との繋がりができている場所はなかった。逆にこうした場所には駐車が多く、裏として感じる場所になっている。この理由は、塀による心理的なものの他に、公園が周辺の街区に比べ大規模であることから、突き当たり道が多くなり交通を迂回させ、奥まった場所をつくるからである。これにより公園に隣接した場所で幹線道路から離れた場所は、閑静な高級住宅地、または劣悪な木造密集市街地になる傾向がある。前者は、青山霊園

(場所1) や代々木公園(場所3)、自然教育園(場所2)が挙げられる。後者は、先ほど述べた明治以降に宅地化された場所で、劣悪な環境となっている。

5. 公園に隣接する都市空間への提案

本論のはじめに取り上げた、芦原が指摘した閉鎖的な公園の境界は現在ではどうなっているのか。六義園では塀が万代塀からレンガ積み風の景観に配慮したものに変えられ、小石川植物園は昔のままである。どちらも塀が立っていて、周辺に対して閉鎖的であることに変わりはない。

こうした状況について改善を訴えていくことは今後とも必要であるが、公園の閉鎖性のもうひとつの要因である、幹線道路と繋がりがなく公園が周辺を奥まった場所としていることについても変えていく必要がある。

公園と周辺都市との繋がりをつくるため、公園の側を変えていこうとする提案として、芦原による日比谷公園改造案がある。これは周辺の道路と一体化した都心の外部空間として、西洋の広場に着想を得た提案である。

このような提案を都心の全ての公園に対して行うことはできない。公園には遺産価値として、公園の歴史性もまた重要であるからである。

また今まで公園と周辺を関係付けるための手立ては、公園とそれに隣接する道路の整備が主であった。それだと公園の閉鎖性の二側面を両方とも解決することはできず、限界がある。

そこで公園の側を改造するのではなく、公園に隣接する都市空間の側に手を加えることで、公園を外部と関係付ける。前章において、発見した公園と周辺空間の関係性の型をもとに、公園の閉鎖性を解消し、隣接する都市空間に与える影響を効果的に増やすための方法を提示する。

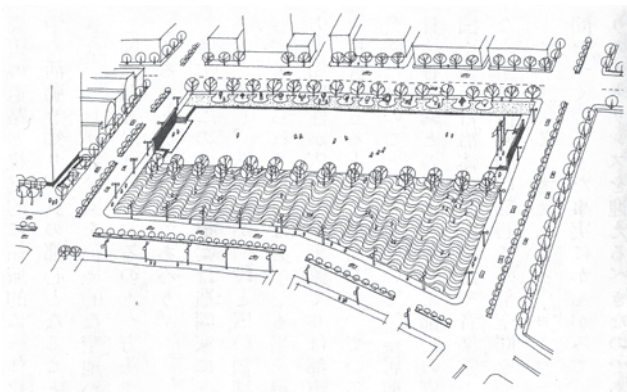
それは、K・リンチの都市にイメージアビリティのを構成する要素を用いて説明すると、公園のエッジをパスとすること、または新たなディストリクトを作り出すことが目標としている。



(fig. 0. 1)
芦原の挙げた公園の塀
(上から六義園、小石川植物園)



(fig. 5. 1)
上の場所の現状
(上から六義園、小石川植物園)



(fig. 5. 1)
芦原による日比谷公園改造案